

「アロン：“いい人”が抱えた問題」

聖書の中に描かれている人間を私達は見ておりますが、そこから分かることはその人達は皆、何かしらの失敗をしているということです。どんなに秀でたもの、よきものをもっていても、人は何かしらの欠点があり、それがあらわになってしまうということが聖書の中には度々あります。これまでもアブラハムやモーセというように、まさしく我々にとりまして信仰の巨人と思われるような人達の失敗を見てきたとおりです。

ということは言うまでもなく私達も常に失敗を犯しやすい者であるということ、失敗が避けられないとするのなら、私達はその犯した失敗に対してどう向き合うかということがとても大切なことになります。今日もある人の失敗を見てまいりましょう。その人の失敗は私達の失敗ではありませんが、人である限り、その人と同じ類の心を持ち合わせているのが私達なのですから、私達はその人の失敗から大切なことを学び、自らの心に刻みたいと思います。

先週はモーセの姉、ミリアムが死んだ直後に起きたモーセの失敗についてお話ししました。そうです、モーセには姉ミリアムがおり、また兄にアロンがいました。この三人兄弟について聖書はこう記しています『わたしはエジプトの国からあなたを導きのぼり、奴隷の家からあなたをあがない出し、モーセ、アロンおよびミリアムをつかわして、あなたに先だたせた』（ミカ6章4節）。そうです、アロンとミリアムはモーセの右腕、左腕となり、モーセを支え、モーセもこの二人がいる故に慰められ、励まされたことでしょう。

先週もお話ししましたように赤子モーセがナイル川に置かれた時に、ミリアムは彼を見守りパ口の娘の目に弟モーセがとまったのを見届けると、そこに走り寄り、乳母、すなわち自らの母をあっせんしました。その勇気と機転は娘としては驚くべきものであり、その彼女の性質は後にイスラエルの民を導く時にも大いに用いられたことと想像します。モーセにとってそんな彼女の存在はとても大きなものでした。ゆえに先週、お話ししましたようにモーセが頑なな民を前に怒りをあらわにしてしまったことも伺い知ることができるのです。

今日、注目したいのはモーセの兄となるアロンです。アロンも出エジプト、そして荒野での日々において果たした役割はとてつもなく大きく、聖書には彼の名前が312回も出てきます。意外に思われるかもしれませんが、モーセが神に声をかけられた時にモーセはどんなに自分は言葉の人ではないかということ泣き言をいうかのように訴えました。これは驚くべきことであり、あのよう

な膨大な数のイスラエルの民の先頭に立つ者が人前で話すことを不得手としました。神様はそのことを承知の上でモーセを選び、彼の横には雄弁家である兄アロンが据えられたのです。アロンはモーセに代わって、エジプトのパロの前に立ち、大いに語りました。まさしくアロンはモーセの口となり、彼に寄り添い歩き続けたのです。

このアロンはモーセと同じようにきわめて柔和な人でありました。弟であるにもかかわらず、アロンは自らの立ち位置をしっかりと踏まえて、イスラエルのリーダーはモーセであるということから遺脱せずに、モーセを「わが主よ、わが主よ」と彼の僕のようになりそのリーダーシップを支えたのです。

アロンはまた同情の人でした。姉のミリアムがらい病をもって打たれた時、すぐに彼は神のあわれみを叫び求め（民数記12章10節、11節）、民の反逆によって会衆の中に疫病が発生した時にも、その中に走り入ってとりなしをしました（民数記16章47節、48節）。聖書は彼を「主の聖者」とたたえています（詩篇106篇16節）。

しかし、そんな彼にも失敗がありました。その失敗の最大のものは弟モーセが40日40夜、山に登っていったのに戻ってこないことがあり、イスラエルの民の間にも不安が広がり、その民の不安が麓に残されているアロンにも日ごとに届くようになります。リーダーであるモーセが不在の時に、それに代わって民を導くのは明らかにアロンの責任なのですが、彼はその時に大きな過ちを犯しました。

モーセも手を焼いたイスラエルの民を前にアロンは立ちました。彼らはモーセが山から下りるのが遅れているのを知り、アロンに迫ります。「さあ、わたしたちに先立って行く神を、わたしたちのために造ってください。わたしたちをエジプトの国から導きのぼった人、あのモーセはどうなったのかわからないからです」（出エジプト記32章1節）。

アロンは彼らに言います。2「あなたがたの妻、むすこ、娘らの金の耳輪をはずしてわたしに持ってきなさい」。3そこで民は皆その金の耳輪をはずしてアロンのもとに持ってきた。4アロンがこれを彼らの手から受け取り、工具で型を造り、鑄て子牛としたので、彼らは言った、「イスラエルよ、これはあなたをエジプトの国から導きのぼったあなたの神である」。5アロンはこれを見て、その前に祭壇を築いた。そしてアロンは布告して言った、「あすは主の祭である」。6そこで人々はあくる朝早く起きて燔祭をささげ、酬恩祭を供えた。民は座して食い飲み、立って戯れた（出エジプト記32章2節－6節）。

アロンのもとには民達が身に付けていた金が集まりました。彼はそれらを受け取ると工具で型を造り、鑄て子牛としました。それを見た民達は喜んだのでしよう。これこそが我らをエジプトから導き出した神だと。そして、飲めや食えやの宴会が始まったのです。

同じ頃、山にいたモーセに主は語りかけます。7「急いで下りなさい。あなたがエジプトの国から導きのぼったあなたの民は悪いことをした。8 彼らは早くもわたしが命じた道を離れ、自分のために鑄物の子牛を造り、これを拝み、これに犠牲をささげて、『イスラエルよ、これはあなたをエジプトの国から導きのぼったあなたの神である』と言っている」（出エジプト記32章7節—8節）。

主はこのことのゆえに怒り、彼らを滅ぼしつくすとモーセに語ります。しかし、モーセは「あなたのしもべアブラハム、イサク、イスラエルに、あなたが御自身をさして誓い、『わたしは天の星のように、あなたがたの子孫を増し、わたしが約束したこの地を皆あなたがたの子孫に与えて、長くこれを所有させるであろう』と彼らに仰せられたことを覚えてください」（出エジプト32章13節）ととりなします。それにより、主はその民に下すと言われた災について思い直されます。

どんな思いでモーセは山を下ったのでしょうか。その手には神から与えられた十戒が刻まれた石の板がありました。しかし、彼が宿営に近づくと子牛と踊りを見たので、モーセは義憤に燃え、その板を投げ、それは砕け散りました。そして、アロンに尋ねるのです。

21「この民があなたに何をしたので、あなたは彼らに大いなる罪を犯させたのですか」。22 アロンは言った、「わが主よ、激しく怒らないでください。この民の悪いのは、あなたがごぞんじです。23 彼らはわたしに言いました、『わたしたちに先立って行く神を、わたしたちのために造ってください。わたしたちをエジプトの国から導きのぼった人、あのモーセは、どうなったのかわからないからです』。24 そこでわたしは『だれでも、金を持っている者は、それを取りはずしなさい』と彼らに言いました。彼らがそれをわたしに渡したので、わたしがこれを火に投げ入れると、この子牛が出てきたのです。25 モーセは民がほしいままにふるまったのを見た。アロンは彼らがほしいままにふるまうに任せ、敵の中に物笑いとなったからである。」（出エジプト記32章21節—25節）。

アロンがまず言ったのは「この民が悪いのはあなたをご存知です」ということ

でした。そう、彼はまずこの民がどんな人達かあなたはよく知っているでしょうと言いました。その背後には「そんな手のかかる者達に一人に対応していた自分のことも理解してください」というような言い訳があったのかもしれませんが。そして、言いました「彼らがそれをわたしに渡したので、わたしがこれを火に投げ入れると、この子牛が出てきたのです」（出エジプト記32章24）。覚えていますか。この前に書かれていた言葉を「アロンがこれを彼らの手から受け取り、工具で型を造り、鑄て子牛とした」（出エジプト記32章4節）。彼はここで自らの保身のために嘘をつきました。

そして出エジプト記はこの事件の原因についてこう書いています。25 モーセは民がほしいままにふるまったのを見た。アロンは彼らがほしいままにふるまうに任せ、敵の中に物笑いとなったからである」（出エジプト記32章25節）。

この後、モーセは主のもとに帰って言いました 31「ああ、この民は大いなる罪を犯し、自分のために金の神を造りました。32今もしあなたが、彼らの罪をゆるされますならば―。しかし、もしかなわなければ、どうぞあなたが書きしるされたふみから、わたしの名を消し去ってください」（出エジプト記32章31節―32節）。彼は自らの命を捨ててまでも民をとりなそうとしましたが、それは叶わず、このことゆえにイスラエルの民の多くは神から撃たれます。出エジプト32章はこのようにして終わります「主は民を撃たれた。彼らが子牛を造ったからである。それはアロンが造ったのである」（出エジプト32章35節）。

先に触れましたようにアロンはいい人でした。あわれみ深く、弟であるにもかかわらずモーセの僕であるかのようにして謙遜に仕えました。しかし、アロンには背骨がありませんでした。「いい人」であるということは誉め言葉として受け取れ、実際に彼はグッドマンなのですが、時にそれは善悪をはっきりとさせずに、その判断は常に人の顔色やプレッシャーによって変わってしまうという一面を持ち合わせていました。己が立つべき所に立たずに、何が善であり、悪であるかということを確認にしないということは、それだけ他者との摩擦、コンフリクトはありませんから、その人は「いい人」と呼ばれます。

しかし、いい人であるということが裏目に出ました。このことゆえにこの時のイスラエルの民は神の前に撃たれてしまうのです。民はほしいままにふるまい、アロンも彼らがほしいままにふるまうことに任せてしまったためです。私たちはこのことを心に刻まなければなりません。

さらにアロンに関して、このようなこともありました。アロンがこのイスラエルの民を前にとったことが別のところでも起きてしまったのです。アロンがイ

スラエルの民に対して彼らがしたい放題にさせたということは、外の世界に対してだけではなく、それは彼の家庭の中でも起きていたようなのです。

アロンには四人の息子がおりナダブとアビフはその長男、次男でした。アロンは祭司ですから、この二人の息子も父と同じように祭司となるべく生まれ、育てられました。祭司とは民がその罪の赦しのために神様に献げるものを、その人に代わって神様に献げる人達です。そして、それにより民の罪は赦されました。それでは祭司はどうなのか。祭司とて人間ですから、彼らは一般の人たちよりもさらに厳粛に自らのために犠牲を捧げなければなりません。まず自分自身の罪の赦しを受けて、神と人との間に立たなければならなかったのです。

そのようにして人々の礼拝を司るのが祭司の務めです。なぜ祭司が必要なのかというと、人間は罪と汚れに満ちているので、そのままでは神様の前に出て礼拝をすることができないからです。神様によって罪を赦していただくためには、礼拝ができないのです。その罪の赦しのために犠牲を献げる重責を持っていたのが祭司でした。当時は祭司が犠牲を献げてくれることによって、人々は罪を赦され、清められて神様のみ前に出て礼拝をすることができたのです。

ナダブとアビフは祭司アロンがする諸々の神の前の儀式を間近に見て成長し、父からその厳粛な役目を教わっていったことでしょう。しかし、レビ記10章1節-3節にはこのようなことが記されています。

1 さてアロンの子ナダブとアビフとは、おのおのその香炉を取って火をこれに入れ、薫香をその上に盛って、異火を主の前にささげた。これは主の命令に反することであったので、2 主の前から火が出て彼らを焼き滅ぼし、彼らは主の前に死んだ。3 その時モーセはアロンに言った、「主はこう仰せられた。すなわち『わたしは、わたしに近づく者のうちに、わたしの聖なることを示し、すべての民の前に栄光を現すであらう』」。アロンは黙していた(レビ記10章1節-3節)。

このところには「異火」と書かれています。これは何を意味するかといいますと、それは彼らが用いた火は主の命じられたものではない、「規定に反した火」だったということです。それでは規定された火とは何なののでしょうか。レビ記の16章12節、13節にこう書かれています。

『12 主の前の祭壇から炭火を満たした香炉と、細かくひいた香ばしい薫香を両手いっぱい取って、これを垂幕の内に携え入り、13 主の前で薫香をその火にくべ、薫香の雲に、あかしの箱の上なる贖罪所をおおわせなければならない。こうして彼は死を免れるであらう』(レビ記16章12節-13節)。

その火は「主の御前にある祭壇」から取らなければならないものでした。しかし、彼らはそれを他所から持ってきたのでしょう。自分で火をつけた炭火で香をたいてしまったのです。

次のオリンピックは東京です。どこでオリンピックがもたれようとも必ずなされるのが「聖火」の点火です。あの火はギリシャのオリンピア神殿で太陽光線によって灯された火を消さないように運び、世界中の聖火ランナーが手から手へと伝えて会場まで運んできます。もしもその聖火ランナーが何かのトラブルでその火を消してしまった場合、それをこっそりとライターでつけ直すことはできないのです。そんなことをしましたらオリンピック史上、大変な不祥事になってしまいます。オリンピックの聖火は「ちょっとぐらいいじゃない」では済まないのです。オリンピックは人間が作り出したスポーツの祭典です。そのオリンピックでさえも聖火をこのように重要視するのなら、神の前に人の罪のとりなしのために出るという厳粛な時にいい加減なことは許されないのです。

しかし、ナダブとアビフのしたことはまさにそういうことなのです。彼らは神の前に出るということをいい加減にしました。もっと言いますと神への畏れを持ち合わせていませんでした。それではその神への畏れを彼らに教えなければならないのは誰だったのでしょうか。そうです、彼らの父、アロンです。

自ら祭司であり、その役目がどんなに光栄に満ちているのか、そして、その使命に最も必要なことは神を畏れ敬うことであり、神が定めたことに対しては完全に従わなければならないということを息子たちに伝えるのはアロンの責任です。

私達は知ります。若者に神のきよさとか、神を畏れるとか、忠実に従うということをお教えるのは大変なことだと。でも特に彼らが祭司となるのであるのなら、このことを習得するのは不可欠なことです。若さゆえに「いちいち、そんなことをやってくれるか」というような心がわくことでしょう。そう、若き時の我が身を振り返ればよく分かります。どこかで楽をしようとしたり、ずるをしようとしたりするのです。そして、その度に私達は誰かにそのことが咎められ、指導される必要があります。言うまでもない、その人のためにです。

アロンはその役目を負っていました。しかし、おそらく先にイスラエルの民に示した彼の姿勢、すなわち「アロンは彼らがほしいままにふるまうに任せた」(出エジプト記32章25節)ということをおもて、その家庭においてもしていたのでありましょう。彼は子供たちを愛するいい父親だったのだと思います。しかし、

いい父親であるゆえに不可欠なことに手つかずでその日に至ってしまったのかもしれない。これ以上に悲しいことはありませんが、このことゆえにこの二人の息子は焼き尽くされてしまいました。このようなことがなぜ起こってしまったのか。この二人の息子の叔父となるモーセはこの悲劇が起きた後に兄アロンに語ります。

「モーセがアロンに「『わたしに近づく者たちに、わたしが聖なることを示し、すべての民の前に栄光を現そう』と主が言われたとおりだ」と言うと、アロンは黙した」。アロンはモーセが言ったことは十分に分かっていました。神は完全に聖なるお方、その聖なるお方の前に人は立ちえない。だから祭司たるもの、本当に厳粛に自らをきよめ、畏れをもって神の前に立たなければならない。しかし、息子たちはそれら一切をないがしろにした、ゆえに彼らは打たれてしまった。ゆえに彼は神の厳しさを嘆くのではなく言葉を失ったのです。このことは申し開きのできないことだったからです。

アロンはいい人でした。私達もいい人になりたいと願います。誰でもいい人と思われたいものですし、いい人であるべきです。しかし、今日、お話したようにいい人が見失いかけているものがあります。それは善と悪に向き合い、そのことに対してどうあるべきかを考え、時には「いい人」ではないと思われようが、正しい決断をすることです。

私達は誰しもアロンの心を持つものです。彼に起きた悲劇から私達は学びたいのです。グッドマンであること、グッドウーマンであること、それに加えて主にある信念に立ち続けること、この大きなチャレンジを私達は主から賜っているのです。一人の人間として、神から委ねられているその生涯を全うすることはなんと大変なことでしょうか。しかし、私たちはこの主のチャレンジを受け止めて一步一步、歩き続ける者でありたいと思います。お祈りしましょう。